
揺れる光

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
揺れる光

【Nコード】
N1008C

【作者名】
まったりorz

【あらすじ】
毎日、薄暗い放課後の教室で、私は理不尽な言葉を聞いていた。教師から向けられる悪意に為す術もなく立ち尽くすだけの日々から。

夕闇に映し出される自分の影も、時計の秒を刻む音だけが響く放課後の教室も、私にとっては、何とも言えない暗い牢獄に置き去りにされた気分させる、悲しい思い出だ。

「人の話をきちんと聞くつもりがない奴は、社会に出た時にやっていけないぞ。お前の生活態度の事だけを言っているんじゃない。人格の問題について言っているんだ」

教室の窓の外は、もう薄暗くなっていた。白い月がぼんやり滲む。目の前で眉間に皺を寄せたままの中年教師の説教は終わる気配もない。家に帰れば、帰りが遅いと親に小言を言われるだろう。そう考えると、どうしようもない溜め息が漏れた。

「その態度は何だ？ 人が真面目に話をしているのに、全くお前は俺の言っている事が解ってないんだな」

無意識のうちに、また怒らせてしまったらしい。だからと言って、その教師の言い分を軽く受け流せる程の世渡りの術を、高校に入ってたての自分は、持っていなかった。私に出来る事は、石のように沈黙する事だけだ。自分の人格そのものを否定する教師の話を、そのまま受け入れてしまう事は、自分で自分を否定する事になる。私は一切の話が、自分の中に入り込まないように、じっと足元を凝視する事に集中するようにしていた。

入学早々、目を付けられたとでも言うのだろうか、その教師は、頻繁に私を注意した。例えば、ノートの取り方が良くないとか、授業中の姿勢や真剣さが足りないとか、服装が校則通りじゃないとか、

一日に一度は、私を注意しなければ気が済まないようだった。

間違った所を注意される事は仕方のない事かもしれない。ただ、自分だけが毎日注意される事に、私はいい加減ウンザリしていたのだろう。

「寝てる人だっているじゃないですか」

たまたまノートを取るタイミングが遅れてしまった時、目敏く注意され、私は思わず言ってしまった。その日から、居残りの説教が日課となって今に至る。

「秋津、お前ちょっと残れ」

H R の後のお決まりの言葉を、私は心臓を重たい何かで殴られるような気持ちでいつも聞いた。もう何十回と聞いた言葉で、毎日決まっていることなのに、いつまで経っても慣れない。放課後の事を考えると、何をしていても楽しくなかった。いつ、どこで、私が何か不都合、いや、その教師にとっては好都合な事、をしでかすのを監視しているかわからない。私は過剰なまでに、神経を張り巡らせていなければならなかった。

頭がガンガンする。いつまでこんな事は続くのだろうか。自分は、何か本当にいけない所でもあるのだろうか。自分は、どこか、そんなに外れているところがあるだろうか。考えれば考える程、私は、暗くぬるい闇の中で、意味もなくがき続けなければいけない気がした。自分を否定するのが、クラスメイトだったらどんなに楽だったろう。ふとそんな事を考えたりもした。圧倒的に立場の違う、教師と生徒だからこそ、自分は律儀にこうやって毎日ただ自分にとって違和感の残る教師の言い分を黙って聞かなければならないのだ。

頭痛は止まない。自分の体にかかる重力だけが、増していく気がする。胸のあたりに消化しきれない空気の塊がつまっているようで、苦しい。心臓が上手く動いていないような感じがして、指先が震えている。私はぐっとその手を後ろで握った。感づかれてはいけない。教師の言葉に、少しでも打ちのめされたり傷付いたりした事実を残してはいけない。

それは、私にとって最後の意地で、そして自分を守る唯一の手段だった。

……その態度が、余計に教師の神経を逆撫でる事も知っていたけれど。

「お前は、人の気持ちについても考えた事がないだろうか？」

教師は、静かにそう言った。目の前で立ち尽くす私を、悠然と椅子に座り見上げる姿勢だったが、明らかにその視線は、見下していた。侮蔑の意味を込めて。

私は、何も答えなかった。私の返答など、必要ともしていないように、目の前の男は話続ける。

「大体なあ、俺だって毎日毎日、お前のためにこんな無駄な時間を使いたくないんだよ。教師だって暇じゃないんだ。お前は、俺のこゝと嫌いだろうけどな、俺だってお前の事は、嫌いだ。お前が将来どうなろうと知った事じゃない。でもなあ、お前の態度が気に入らないんだよ。お前は、教師ってもんに気を遣え。少しは改心してみせろよ」

薄暗い。世界はぼんやりと薄暗い。

私は、薄々感づいてはいた違和感の正体をやっと知った。自分は嫌われていたのだ。悪意の対象にあったのだ。そう思うと、笑うしかないような気もした。どこか、自分は子供っぽい理想を現実を求める所があったのだ。教師は公平であるべきだ、とか、教師は生徒の事を真剣に考えるべきだ、とか。私はそんな考えを持っていた自分が虚しくなった。教師だって理想の生徒像を私に押し付けている。きつとその世界はかみ合うはずもない。

「無駄な時間を使う必要はないですよ。私は先生の思うような生徒になるつもりはありません」

それは、私がこの長く続いた毎日の居残りで、はじめて発した言葉だった。思いもよらない突然の反抗に、教師は激昂して机を叩いた。

「ああ？ お前、何だその態度は？」

老いを含んだ暗い瞳に、ありありと苛立ちの色が浮かぶ。その憎しみのようなものをはっきりと持った教師の目を、まの当たりにして、今までの理不尽な仕打ちに関する激しい怒りが、波のように、自分に湧き起こってくるのがわかった。

「先生は、私の事なんてどうでもいいんでしょう？ 私は自分の事をそういう風に思う人間のために、自分を変えようなんて思いません。もう放っておいて下さい。改心なんて絶対にしません」

最後は半ば感情的になっていた。教師が自分の肩を掴んだのを、無理やり振りほどいて逃げるように、教室を出た。思わず流れた涙にか、それとも憎しみを凝縮させた瞳の色にか、初めて見せたであ

ろう私の表情に戸惑ったらしく、自分を追う足音は聞こえなかった。いや、聞こえるはずもなかった。

暗い世界に灯るオレンジの外灯が、白い月が滲んで揺れる。私はこれからの身の振り方を考えなければならぬ。ただ子供のように泣いてしまった事が悔しい。私はもっと固く自分を閉ざし、それで自分を守っていなければならない気がしていた。

でも涙は止まらなかった。悔しいのか悲しいのか怖いのか、わからないまま、気が狂ったように叫び出したい衝動を抑えて、私は泣いていた。泣かない事が自分にとっての最後の譲れないものだったはずだ。今まで、教師にどんなに理不尽な事を言われたって、泣いたりとはしなかった。そんな事で、教師の自己満足を満たしたりはさせない、そう強く誓っていた。私は何か、これからの誓いを立て、自分を支えてやらなければならない。

明日は、どう世界は動くだろう。また、牢獄のような放課後の教室に、私は閉じ込められるだろうか。それとも、教師は私を泣かした事実で満足して、他の見せしめを探すだろうか。揺れる暗闇の世界は、夏の夜特有の匂いがする。私は、その空気を思い切り吸い込んだ。

まだ、呼吸は出来る。

私は、改心しなければならない。

教師の言った改心ではない。もっと自分を強く持つために。教師の言う理不尽な世界に流されないように、するために、だ。

夜に存在する光は、揺れ続けている。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1008c/>

揺れる光

2010年10月11日14時11分発行